

土木が持つ文化的価値 — 琵琶湖疏水^{そすい}国宝指定から考える —

Civil Engineering's power in shaping culture
— Celebrating Lake Biwa Canal as national treasures —

特集担当主査：増田 貴之

特集担当副査：中川 嵩章

特集企画担当：石橋知也、泉真利子、亀井優樹、川口暢子、小松一弘、高橋良和、
田中尚人、永野愛季、廣井慧、宮澤俊治、横田祐起

ABSTRACT

In August 2025, twenty-four facilities of the Lake Biwa Canal were designated as Important Cultural Properties, with five named as National Treasures—the first such recognition for modern civil engineering. Completed in 1890, the canal was a foundational infrastructure that supported the recovery and development of Kyoto following the Meiji Restoration. As a multipurpose system, it supplied water, enabled hydropower, and supported irrigation, contributing significantly to regional industrialization and urban modernization. The canal's excellence, recognized by the Telford Medal from the ICE, marks a seminal achievement in Japanese engineering. Beyond its functional value, the canal has shaped Kyoto's landscape, imparting enduring cultural significance. This special issue examines the cultural value of operational infrastructure, emphasizing its historical context and contribution to urban innovation. By analyzing the engineers' professional ethos, the issue highlights the educational significance of civil engineering heritage. Through multidisciplinary perspectives, including international examples like Taiwan, this collection aims to advance discourse on integrating cultural value within environmental and urban networks.

「琵琶湖疏水」が 近代土木構造物として初の 国宝と重要文化財に指定

2025年8月、琵琶湖疏水の諸施設24カ所が重要文化財に、さらにそのうち5カ所が近代土木構造物として初めて国宝に指定された。琵琶湖疏水は1890（明治23）年の竣工^{しゅんこう}以来、明治維新において衰退の危機にひんした京都の再生と発展を支えたインフラである。水道・水運・水力発電・灌漑^{かんがい}など多目的に利用され、京都の経済や産業、そして文化の発展に大きく寄与したことは疑う余地がないだろう。さらに建設に大きく携わった田邊朝郎が日本人として初めてテルフォード賞（イギリス

土木学会）を授与されるなど、国内問わず高く賞賛されている。そして、国宝・重要文化財の指定に至った2025年5月16日に開催された文化審議会での答申^①では、「京都の比類ない風致を育んだ琵琶湖疏水の代表遺構であり、文化的意義も極めて深い」と評された。今でもなおお役に活躍している琵琶湖疏水に敬意を払いつつ、本特集を始めることとしたい。

土木が持つ 文化的価値と役割とは

国宝をはじめとする文化財は、わが国の長い歴史の中で生まれ育まれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民の財産である^②。インフラと

して今もなお機能している土木構造物の文化的価値が今後も評価されることを期待し、土木遺産の歴史や背景をいま一度考えたい。現代を生きるわれわれにとって、先人が築いたものを詳しく知ることは、よりよい社会を築きつかけになるに違いない。

そして建造にあたった先人の尽力・先見性・使命感などを学ぶことにより、土木技術者に対する教育的価値や、意識・プライドといったモチベーションを醸成するような役割もあるだろう。本特集でもさまざまな技術者や功労者が登場するので、ぜひそこに込められた思いを感じていただきたい。

その他にもインフラとしての役目を終えた後に、景観やそのまわりのランドマークといった役割に変わるような構造物もある。土木学会では「選奨土木遺産」の顕彰を行っており、失われるおそれがある土木構造物の救済を一つの目的として掲げている。その結果として、一部の自治体では市民の当事者意識を喚起し、構造物はもろろん周辺環境の整備に発展した事例もある。今ではインフラ

ツーリズムを筆頭に、地域のモチベーションの醸成に成功しており、広報的な価値と役割の重要性は増している。

さらにいえば、土木の価値は単体の構造物で完結するものではない。自然環境と都市全体のネットワークの中で果たす役割や、都市の機能革新をもたらず役割もあるだろう。冒頭に挙げた琵琶湖疏水もまさに、関連する構造物が群として機能することで、都市の機能革新に寄与した事例である。都市の機能革新を果たしつつ、文化的価値をはじめとした新たな価値を創出する背景についても考えたい。

本特集の構成

こうした広い視野を持ちながら、土木が持つ文化的価値について、考えを深めていきたい。そこで本特集では、始めに琵琶湖疏水に焦点を当て、田邊朔郎の一族(田邊家)しか知り得ないエピソードをはじめとした多様な観点からの論説によって、琵琶湖疏水への理解を深めることとする。次に、文化的価値を広く認識す

るために、土木遺産をはじめ全国に点在する構造物を対象として、さまざまな有識者より論説をいただいた。鼎談では、土木構造物を包摂する周辺環境も対象にしながら有識者が議論を交わした。そして、さまざまな施設を取り上げながら土木遺産の評価を考察し、さらには海を越えて台湾の発展に寄与した日本の土木技術者も紹介する。

琵琶湖疏水が近代の土木構造物として初の国宝指定を受けたことに祝意を表して、土木が持つ文化的な価値と役割を考える契機に発展すれば幸甚である。

参考文献

- (1)文化庁：文化審議会の答申(国宝・重要文化財(建造物)の指定) https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshrase/hodohappyo/94214501.html
- (2)文化庁：文化財 <https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/>



写真1 田邊朔郎が描いた「白駒」
(撮影：増田貴之、8～11頁で取り上げた「百石齋」に所蔵されている)